

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 342-2590
第151号・平成14年4月1日

年表で読む

古平の歴史

《57》

海運の移り変り

■海難防止の通知

帆船による物資の輸送が盛んになるにつれて、荷物を積み過ぎることが原因の海難が多くなり、開拓使長官から海難防止の厳しい通知が出されました。

「道内においては、日本型商船（弁財船など）はすべて船鑑札を検査し、積石数を超過して荷物を積んではならない。この制限に従わないときは、超過した荷物はすべて没収する。」

しかし、実際はこれを守る者がなく、遭難する船が相次いだためさらに厳重に取り締まりを行いました。

「これまでの通知のように、鑑札による石数では実態に合わない

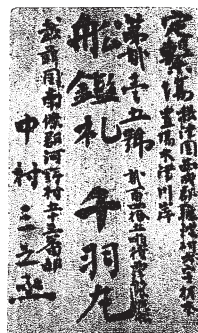
いので、鑑札にある石数にかかわらず、船腹の外板一枚分沈む石数を原則とし、実際に船の状態を確かめ、能力を審査して、それによって石数を多少加減し、荷物の積載を決定する方法に改めることにする。これについてはそれぞれの役所で検査し、それに従わないときは超過した荷物を没収する。」

これ程厳しい取り締まりをしましたが、その後も荷物の積み過ぎによる遭難船は後を絶ちませんでした。

これには、古くからの『ホマチ』という習慣がありました。浜では今でも使われている言葉ですが、ホマチ（帆待ち）というのは、北前船などの乗組員が自分で買った品物をひそかに船

に積み込み、港に入ったときにそれを売って利益を得ようというもので、乗組員の身分によつて持ち込む積み荷の量にも差があったようです。つらい命がけの航海での、これは大きな楽しみでもありました。また船主が、積み荷の五分から一割程度を手当てとして支給していたということもあり、これもホマチと言っていました。

△船鑑札・千羽丸▽



■古平沖での遭難
古平郡内でも遭難があり、そのときの文書が残っています。

難船検査届

十月七日午前八時頃、古平郡入船町丸山岬沖で難船の届けがありましたので、早速出かけ調べに参りました。船は丸山岬沖一里半（六吉メートル）程のところ沈没しているようで、船は岡山

県備中浅口郡乙島村の万幸丸、赤沢松三郎が船頭で水夫七人、備中玉島から塩・綿を積み、七月十三日出港、八月六日小樽港に入港して陸揚げし、鯨鮫め粕三百十六石、鰯鮫三十五石、昆布四十二石を積んで、直ちに岡山県へ帰るつもりで本月五日出港、午後六時頃、積丹郡沖にさしかかったところ急に風が強く波も高くなり、六日午後八時頃には丸山岬沖まで吹き流されてしまいました。船の中にも水が入り、乗組員全員が精一杯力を尽くしましたが、船体も破損しついに水船になり、沈没しようになりました。何分夜で、しかも沖合いのことですので救援を求めることもできず、本船をつなぎおき、はしけ舟を降ろして午前三時頃、入船町へ上陸いたしました。乗組員一同は無事ですが、船体は破損し流失してしまいました。はしけ舟は新地町津田清兵衛へ預け帰国いたしたいと思しますので、以上の通りお届けいたします。

明治十二年十月十八日

※（ページ上段へ続く）

私はいろいろな寺を巡りながら、多くの仏像を見ってきましたが、仏教とか宗派とは関係なく、一番好きな仏像は奈良興福寺の阿修羅像です。

この像の顔は切ない目をした女性の顔でもあり、見る方向で

私の好きな仏像

室 谷 忠 雄

は少女の顔にもなる三面六臂の像です。とても天上の帝釈天に闘いをいどんだ仏とは思えない仏像なのです。

二番目が京都広隆寺の弥勒菩薩思惟半跏像（みぞきつはんかぞう）で、宝冠弥勒とも呼ばれてよく

※（一ページ下段から続く）

旧戸長兼浦役人

宮崎彦八 ㊦

区長 出羽佐太郎 ㊦

開拓大書記官

調所広文殿

■荷物の販売と廻船問屋

北前船は北海道へ向かうとき（下り）の積荷は米・みそ・しょう油・塩・酢・油・むしろ・

知られています。この仏像は、

日本で国宝第一号になった仏像でもあるのです。飛鳥時代に作られたことは分かっているのですが、作者やどこで制作されたのかは分からないそうです。ただ、弥勒菩薩と全く同じ形をし

た銅像が韓国ソウルの国立博物館に、国宝として指定され安置されているそうです。

広隆寺は京都でも一番古い寺と言われています。秦河勝（はたか）おつが聖徳太子の軍政人（軍事顧問）をし、六〇三年、その聖

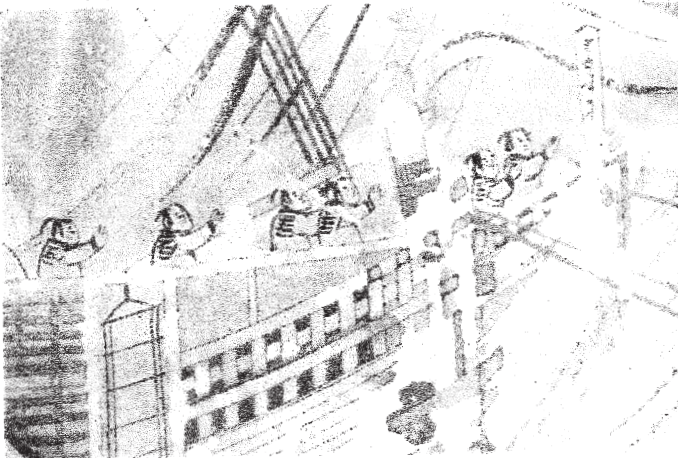
徳太子から仏像を賜り建立したのが広隆寺なのです。

五世紀には朝鮮半島から大勢が渡来して来て帰化しましたが、そのとき一族やそれらの人たちを率いて渡来したのが秦氏の祖先でした。そのあたりにこの弥勒菩薩の由来があるのでは、とひとり考えあぐねています。



広隆寺宗印

縄・ろーそくなどが主なもので、入港すると取り引きのある廻船問屋の手を経て荷物を売りさばき、その金を問屋に渡して『店手形』をもらいます。そして、その金額に相当する品物（海産物）を廻船問屋の斡旋で買い込み、本州へ運んで売りさばいてから、その金額を返済するという仕組みでした。日本海沿岸では、鯨漁の始まるころから吹く南寄りの風をクダリといい、これに乗って北前船が来しました。鯨漁の終わるころには本州へ戻るが、このころ吹く風を沿岸ではアイノ風といい、この順風を利用したのです。それからまた荷物を積んで来て秋に戻るといふ、年二回往復する船もありました。明治一五年には、



北前船として使われていた大型の和船は安全上の理由から建造が禁止され、洋式帆船や汽船が急速に活躍する時代になりました。また、陸上では鉄道が輸送の主役を担うようになり、通信の発達と合わせて、北前船は日本海航路の舞台から次第に消え去っていききました。

△時化に遭い、あとはただ神仏に祈るしかない乗組員 絵馬より▽

のろし台シリバの岬と相対し

烽火台（ほうかだい）とも言いますが、急を知らせるための合図の火や煙をのろし（烽火・狼煙）と言っていましたので、のろし台の方をとりました。

昔は、高い山や見通しの良い岬などよく目立つ場所に、緊急の合図や連絡のために設けられていました。

丸山頂上ののろし台も、アイヌの人たちがそのために使っていたと考えられます。今から一五〇年程前の本にも、「丸山に烽火場あり」とか、「マルヤマ崎ここに烽火あり。三間四方（五・四メートル）、高さ一丈（三メートル）」と書いています。

丸山は海上や海岸からはよく目立ち、昔の記録にも「すり鉢を伏せたような形」と書いてあったり、古平の語源ともなっている『フーレ・ピラ』というのは、丸山の北側の崖を指しているのではないか、という説もあります。



また、崖の下の海岸一帯は鯨の好漁場で、昔はここをトマリ・エサン（泊まり・頭が浜の方に）出ているところ」と呼んでいたようです。

丸山は高さは二〇〇メートル足らずですが、海に突き出ている周囲の眺望がよく開け、積丹町側は岬が重なるように見え、余市古平の語源にもなったといわれる丸山

丸山登山道の案内板



の方角を見ると、シリバ岬の特異な山容を遥かに望むことができます。

のろし台のある頂上付近は樹木が少ないのですが、周囲の樹木にさえぎられて眼下の町並みは見られせん。

ふるびら温泉裏側から頂上までは登山道が整備されていて、すぐ裏に見える公衆トイレの側に案内板が立っています。道幅一メートルちょっとですが全体に勾配はゆるく、海側には防護柵が設置されています。野の花が群

落をつくるようにして咲き、小鳥のさえずりも聞こえ、樹間を楽しく散策しながら登ることが出来ます。

頂上に近いのろし台の案内板が見える辺り、一段下がつて市街地側に「憩いの場」という休憩場があり、少し登ると道もなだらかになります。

丸山烽火所跡の案内板



間もなく『丸山烽火所跡』の案内板が立っていて、その後ろにある柵で囲まれたのろし台が見えてきます。

☞（次ページ4段目へ続く）

ふるさと——断想

大 沢 文 子

春とは名のみ、海を渡る風は冷たい。沖合い遠く、汽笛を鳴らし過ぎゆくは何の船か。朝の日ざしに時折りきらめきを見せ

て……

だが……私の心は重い。「どうして？」明けても暮れても悩みは消えない。

昭和二十二、三年頃の古平町には、まだポンプも水道も各家庭にはついていなかった。私どもの住んでいた沢江村では、海際の坂田さんの家近くに掘井戸の小屋があり、木の柄のついたポンプで水を汲みあげる仕組みになっていた。日に幾度か主婦たちはそれぞれ大きなバケツに水を満たし、天秤棒で軽々と担ぐ。

どこの家でも、台所の流しの側には四斗樽ぐらいの大きな水瓶を据え置き、汲んで来た水と満たし一日中使用していたもの

である。

何回か私も天秤棒を担いでみるが、肩からずり落ち、両端についている鎖がガチャンと音をたてて落ちる。その切なさ。

仕方がないので、一度二度と大きなバケツに半分程の水を汲み、両手に下げてやつの思いでわが家へ戻るが、途中で砂や汚物が入り使い水にはならなかった。

天秤棒を担ぐことの出来る人たちはどんなにうらやましく思ったことか。

見かねて知り合いの女の人が手伝ってくれた。水を満たした水瓶には木のふたをし、大切に一日の食食用その他に使っていた。

何年か経てその苦勞も忘れ、それぞれの家庭にポンプがつくようになった。ギーコ、ギーコとポンプの柄は重かったが、何

度も汲み上げ思うまま水仕事に精を出す楽しみをもった。

それから何年後であろうか。古平町にも水道がつくようになった。たしか昭和四十年の秋頃だったと思うが。主婦たちの喜びの聲が今でも聞こえそう。

わが町にも水道つきぬ工事場の若きに主婦ら勞をねぎらふホツとしたその頃であろうか。私の心の中にも暖かいゆとりができた。そして今までになく神秘的な海にむかう日が多くなったのである。

・時化あとの岩の間より淡あはと妖しきまでに浪の花舞ふ
・時化あとの小岩にぶつかり、石礫の泡のような美しさを浪の花というのよ、と人づてに聞いた。

また、海岸近く立ちこめる白い湯気、あれは「けあらし」といふのよ……と歌びとがそっと囁いてくれた。

「海は生きている！」しみて思った若かりし頃である。



㊦(前ページより)

『この烽火所は、標高192mにあり、西辺の警備のため、寛政2年(1790)頃、松前藩の命により、古平場所請負人岡田弥三治(8代)が岩盤を直径2m、深さ1mに掘り、その上に薪を5m四方に高さ3mに積み置き、郡内の異変、或は異国船を発見した時これに火を放ち烽火を挙げ、美国、余市方面へ知らせ、更に松前へ急使をたて防備に当ったものである。』と、書いてあります。

夜は火、昼は煙が目立ちます。いろいろな工夫をし、煙に色をつけたり断続して煙を揚げたりして、前もって決めておい方法で合図をしたようです。また、オオカミ(狼)の糞(ふん)を燃やした煙は風になびきにくく、煙がまつすぐ揚がるので珍重されたそうです。それで狼煙と書いてのろしの当て字にしたのかも知れません。

古平の数少ない遺跡として、折を見てのろし台を訪ね、景観を楽しみながら昔のロマンを感じてみてはいかがでしょう。

〈大正九年〉

10/9 昨日の暴風ずい分激しかった。今朝は時々雨だった。午後から晴れた。農園ヘリンゴの様子を見に行ったが、49号9号が大分残っていて、落ちたのは意外と少なかった。店では大謀のロープ、アバ縄などが出る。品切れせぬようにすればずいぶん売り込めよう。沖村大謀は今日までに一万円からの漁があったとのこと。

10/10 朝夕の寒さに子供たちもたびをはくと云っている。天気は快晴で、妻や熊さんなど四人が農園のイモ掘りに行く。屋根を塗装する職人が来る。

10/11 今日快晴で風もない。こんな日の山遊びはさぞ快適ならん。午後、自転車で大謀の勘定を受け取りに行く。二百円余りあり銀行へ行く。熊木湯屋に寄り、話をして遅くなりちようちんを借りて帰る。

10/23 大謀から網、ロープの注文があり馬車で届ける。合計四四〇円程あった。出面三人を頼んで農園の豆落し、大根拔

き。リンゴの枝切りなどをする。小樽へ送るリンゴの荷造りをし古英丸に積み込む。今、困の大謀でブリ大漁、一千尾程獲れたという。家でも一尾貰う。

10/24 寝ていると花火の音が聞こえる。今日は在郷軍人会の射撃大会と観楓会があるとのこと。八時ころ、一行七、八〇名が畑通りを行った。風も寒く晩秋の景、四方の山々は草木も枯

高野名幸作さんの日記から

当分の世相を見る

れて寂しくなった。

10/26 七時に起き、新地山の上の測量を管野さんに頼んでおいたので行って見る。午後からは農園でリンゴの枝切りをする。全部で四〇本程切った。

10/27 今日秋晴れの珍しい好天気、小春日和だ。昨日、測量を頼んだ畑を見に行く。一〇〇坪程のところを、知らない間に美国への新道に六〇坪も取られた。農園では出面を六人頼ん

で秋肥をやっている。自転車畑方面へ行つて見たが、沿道では、どこもこの天気で大根抜きや豆落しを一生懸命やっている。人間は壮健で働くのが何より楽しく、また幸福だと思つた。床にあつては、どんな富豪に生まれても何にもならぬと思つた。天気が良いので、あちこち見て二時ころ帰る。夜は十六夜の月がこうこうと輝き昼のよう

だ。田からサバ一もつこ貰う。

10/28 大謀はどこも大漁で、ブリ五、六〇〇尾ずつ獲れて町中の景気もよろしい。

10/30 午後一時から、学校で表彰式と尊老会があり出かける。表彰は道路工事への寄付で山口金治氏と、教育者では三〇年勤続の一戸範氏。また尊老会では、七五歳以上の老齢者七八名中六八名が出席した。余興に尺八・琴・三味線・琵琶・浪花節な

どがあり、ずいぶん賑やかであった。

11/1 今日明治神宮鎮座式の当日、学校では選拜式がある。今日で三日も学校で式があるのだが、こんなことも珍しい。夜、通夜に行ったが暖かくて夏のようにあつた。夜になって雨が降る。

11/2 昨日の雨は朝になって晴れた。日光が輝きまるで小春日和のようだ。上野さんの葬式に行く。まだ二五歳だというのに惜しいことだ。午後、農園の後始末に行く。

11/4 今日青空で気持ちが良い。美国行きを思い立つて、八時半、新地まで自転車で行き、自転車を預けて坂道を歩く。沖を見渡すと実に景色が良い。群来村から厚志までの海岸の景色は目が覚めるようだ。東京近在なら別荘地だろう。九時半ころ美国に着く。大謀に行き内金を受け取り、三、四軒廻る。美国も不景気だ。古平の方がまだ良いようだ。一時ころ帰ったが汗が出る程の天気だ。

11/5 六時起床 昨夜

時頃から一天にわかには曇り、墨を流したようであつたが、午前二時頃に雷鳴があり雨が降り出した。間もなく急に寒くなつたと思つたら雪が降つて来た。海は時化で、汽船が避難して停泊している。夜になり、子供等がこたつをかけるというのでこたつを出す。波の音が店まで聞こえてくる。

11/6 夜が明けると一面の銀世界、いよいよ冬景色となり、外套(がいこう)や靴の季節となつた。寒暖計を見ると四〇度F(四・四C)。

11/7 西風激しく大荒れ、汽船が五隻も避難している。一〇時から禅源寺で禅学会の講話があるので行く。二名が出席し二時間程の講話であつた。昼食を馳走になつたが、一時頃から急に暴風雨が激しくなり歩かれない。寺の建物もミシミシ音をたてて恐ろしいくらいだ。三時頃帰つたが、道路はまるで泥田のようであつた。

11/9 浜へ出て見る。沖はまだ時化しているようで、汽船が五隻そのまま停泊している。サ

バが大漁で安いというので、熊さんと入船町まで買いに行く。一樽一円だということで三樽買つて来る。午後、銀行へ行つたら支店長が余市へ転任だという。明後日出発、明日、美登利で送別会があるという。夜はサバ焼きに五人が雨がしとしと降っているが暖かい。

11/10 今朝、甲谷回漕店の船(はね)が荷物を積んで転覆六〇個余りの荷物がぬれたとのこと。店の荷物もあり困つたことになつた。支店長の送別会が五時から美登利であり、三〇余名が出席する。九時帰る。

11/13 寒い朝だ。一〇時頃役場へ行く。畑地を美国への道路に取られたことについて図面を見る。話を聞くと役場の過失のようだ。一六日、然別まで鉄道線路踏査隊が行くというので参加を申し込む。夜、火防組合で町内を廻り、後、工藤定五郎のところに除隊祝いの挨拶に寄る。

11/16 今日、鉄道線路踏査隊が然別まで行く日だ。母も妻も起きて、おにぎりや朝食の準備をしている。五時半、役場へ行

く。一〇人程が集まっていたが、一〇時出発する。一行三名、風は寒いが珍しい好天気、途中で休憩、九時半、稲倉石に着き記念撮影をする。これからは山道を登るが、少し分ときつい。一里程登つたら少し平地に出た。そこからまた一里程歩いて、余市の町の見えるところへ出た。そこで昼食になつた。ここから道は下りで、一時頃然別鉦山に着いた。高い煙突を見て、二〇数年前に来たことを思い出した。三時

然別停車場に着いたが、少し分疲れた。二三名全員が無事に山道を歩き通し、停車場に着いたらまわりの人たちが不思議そうに我々を見ていた。四時三〇分発の汽車で余市に行く。余市では「旅館」に入つたが、四室通しの部屋は賑やかなこと。どてらを着て皆えらい元氣だ。湯に入り、酒が三升届けられていた。沢山のリングも出て、夕食の後には二階の部屋で休んだが、多くは芝居見物に出かけた。

11/17 七時起床。昨夜はずい分とやった。一行のうち、一〇名程は早朝の発動機船で出発し

た。私は(主人)や一〇名程で山田町方面のリング園を見学に行く。畑はずい分ときれいになっている。一時頃宿に戻り、沢町方面の得意先を廻りいろいろと話を聞く。道路がひどかつたのにびっくり、四時発の汽車で小樽へ行く。

11/19 雨天だ。小樽で用事を済ませ、午後四時の汽車で余市へ向かい、(旅館)に泊まる。夕食の後、貸売りの催促に二、三歩いたが、どこも要領を得ない。春から再三催促し、この悪路を一里も歩いてわざわざやって来てこのまま帰るとは、貸売りはつくづくいやになつた。仕方なくまた悪路の暗夜をとぼとぼ帰り、すぐに休む。

11/20 一時頃、湯内から来た発動機船に乗り出発。正午頃湯内に着く。山科に寄り昼食を馳走になり、二、三軒廻り、半金程払ってもらい、後は春の払いにする。二時に出発し、山道を歩いたが、甚だしい悪路だ。途中また寄り、家に着いたのは五時だった。

(以下次号)

心に残る名僧のひと言

貧乏人には登り坂がある

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

昭和十九年十一月三十日。
みぞれ混じりの雨が横なぐりに降りしきる寒い朝。長い闘病に力尽きた次姉が他界した。
幸せ薄く、わずか十八才の余りにも短い生涯だった。

わが家では「新仏」だったので、お寺さんを決める事が第一の仕事だったが、運よく近所のお世話好きのおじさんが、わが家と同宗派のお寺さんを知っているとの事で「新檀家」のお願いをして頂く事にした。

そのお寺さんは、この地方では唯一「院」を称号している格式の高いお寺さんだった。

程なく帰って来たおじさんは「あいにく、和尚さんが留守な

ので、すぐに返事は出来ませんとの事でしたが、職業を聞かれ『日雇いです』と言ったところ、他所にお願いをして下さいと言われました」との事。

冷たくなった次姉の手を握っていた母が、血相を変えて「日雇いの貧乏人だから断ったんでしょ。人を見下げるようなお寺になんかお世話にならないとも良い。私が別のお寺さんに頼んでくるから」

こう言った母は、涙を抑えながら、降り止まぬ雨の中を小走りで行った。

貧乏人の僻目かも知れないが「日雇い」であるが故に断わられたと解したのです。本寺の和

尚さんが留守ならば脇寺を紹介して下さればいいものを、と。

小一時間も過ぎた頃、成り行きを案じていた私たちの前にズブ濡れになった母が、息をはずませながら帰って来た。そして次姉の枕元で

「ああ。良かった良かった。良いお寺さんだった。お前も良い和尚さんの導きで極楽の一番良いところ行くんだよ」と語りかけ、声を震わせながらこう話してくれた。

檀家にして下さるなら宗派は違っても良いと覚悟を決めたものの、門前に立つと「断わられたらどうしよう」という思いが頭をよぎり、五つも六つもお寺さんを素通りし、とうとう町外れにあるお寺に来てしまった。意を決した母は、深々と頭を下げ、すぎる思いで

「私の家は、五人の子供を抱え日雇いのその日暮しの貧乏人です。今朝、親らしい事をしやれなかった娘が亡くなりました。和尚さん助けて下さい。仏になった娘を導いて下さい。お願いします」

と哀願したそうです。じっと聞いている母の肩に手を載せ

「何を言うんですか。貧乏は恥ではありません。お金持ちには下がるだけです、貧乏人には、これから裕福になれるという登り坂が待っているのです。子供が大きくなり働くようになれば豊かになるのが目に見えるではないですか。頑張りなさい。子供は宝です。私も喜んで檀家になってもらいます。さあ、早く帰って娘さんを安心させなさい」と、穏やかに諭すように話してくれたという。

間もなく和尚さんがお出でになり、葬儀の一切を細かく説明された後、お寺さんではご法度といわれているお布施の額を教えてくださいました。

後で分かった事です、その額は世間の方がお包みする半額にも満たない額だったのです。以来、この和尚さんの温かいお言葉に心を打たれた母は、折にふれてお寺を詣で、和尚さんとの語らいを楽しんでいた。

短歌

吉平町岬短歌会

一穂の詩碑建立の記念写真中に在りし日の我が夫が居り

池田 テル

霜降れる落葉の径を登りきて山かけ深き夫の里訪ふ

竹内 コト

雪原にハウスの骨の並びて風は哭くことき音を伴ふ

東 美知

吠えること春一番の風鳴りて積りし雪の消ゆるがうれし

柳 佳代

弥生半ば寒さもどりと積もるともなく雪の降る暮れなごみつ

鈴木 時子

雪のこる川沿ひにつづくねこ柳の芽吹の満ちて輝やく陽の中

丹後 初江

おだやかに川の流れは春なれど類触る風は冷たく痛し

田中 香苗

海遠く雄冬の峰の影明し春の色とぞ友に知らせぬ

山口 スエ

青みさす丘のあたりに黄緑の光と思ふ路のたう萌ゆ

堀 典子

俳句

吉平ホトトギス会

山の温泉に一日遊び日脚伸ぶ 斉藤波留

春時雨母の遺せし琴の爪 山口悦子

白酒や男兄弟二人かな 越野敏雄

春風や娘は国際線を発つ時刻 大和田絵伊

あるまゝに飾らず生きて木の葉髪 福井幸平

流水のくだけし海の碧さかな 関口勝志

訪ね来て忽ち暮るゝ日短か よしざきり

温泉の里へ誘われるまゝ路のとう 仲谷比呂古

春の雪積る程では無かりけり 室谷弘子

冬波に冷蔵庫まで寄せられし 泉 清三

——編集集雄雄記—— ジを増やしてご紹介します。

▽雪解けも早く、春分は季節 今回は、原稿の都合でちよ

感にびつたし。昔だと家々で つと違う編集になりました。

おはぎを作ったものです。 増ページすると売れ行き？も

▽高野名幸作さんの日記は昭 好調です。で、積極経営で

和三七七年まであります。ペー きたいと考えております。